

2021年12月4日スポーツ史学会第35回シンポジウム

「大学を拠点としたスポーツの歴史資料の利活用-教育・研究への還元に向けた課題-

ヒストリアン、キュレーター、アーキビスト(仮)

日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所

富田 幸祐

日本体育大学 オリンピックスポーツ文化研究所

2015年4月に付属研究機関として設立

日本体育大学はこれまでメダル獲得においても選手と役員の活躍の面においても、近代オリンピックの歴史とともに歩んできた。これはまさに日本のスポーツ文化の歴史ともいえよう。そして本学はオリンピックに託された人類の夢を守り、崇高な理念を継承していく学問の府でありたいと願う。よってここに、本学の学術的ならびに社会的責務を果たすため、オリンピックの研究を推進し、その成果を次世代に贈るためのオリンピック・スポーツ文化研究所を設立する。(HPより)

目的

- ・オリンピックの歴史、理念の研究(文献収集、国際的な研究情報の収集)
- ・日体大におけるオリンピックの歴史の構築(卒業生、関係者の品物、練習日記などの文書の収集と展示)「オリンピック博物館」あるいは「日体大オリンピック記念館」等に発展することを検討する。

日体大、オリンピック(・パラリンピック)に関わる文献や資料の収集を意図

「博物館」や「記念館」構想も研究所の将来的射程

研究プロジェクトとしての史料整理

2015年～2020年：猪谷文庫の整理と解題

猪谷千春文庫、NSSUアスリートコレクション、成瀬郁夫コレクション

2021年～現在：オリンピックスポーツ文化研究所所蔵品の整理と目録・解題

猪谷千春文庫、NSSUアスリートコレクション、成瀬郁夫コレクション、伊原義文コレクション、村山隆文書、松澤一鶴フォトコレクション、山田良樹コレクション

所蔵資料がこの5年で増加

現在も随時受け入れ態勢

資料収集（購入含）は積極的に実施
東京2020大会関連記念品の収集

受け入れが叶わなかった資料もある

置き場所問題

研究所における「私」の史資料に関わる活動
利活用（現状・展望）／収集の実践／整理

スポーツの歴史資料を使う

資料が日の目を見る機会の創出

閲覧／展示／貸出

東京2020大会招致委員会／組織委員会関係者の閲覧

日体フェスティバルにて所蔵資料（主にNSSUアスリートコレクション）の展示

「水戸芸術館開館30周年記念事業 森英恵 世界にはばたく蝶」への貸出

猪谷文庫及びNSSUアスリートコレクションの一部の学内展示を実施（現在休止）



日体フェスでの展示



森英恵展での展示

スポーツの歴史資料に出会う

伊原義文コレクション、村山隆コレクション

研究プロジェクト「オリンピックと芸術文化」及び「日本におけるオリンピック・パラリンピック招致」で長野パラリンピック調査で関係者へのインタビューを実施

伊原義文氏（長野パラ事務局次長）：インタビューの際に寄贈の打診

村山隆氏（信越放送）：インタビューの際に資料を提供

スポーツの歴史資料に出会う

山田良樹コレクション

用途、経緯不明の瓶詰めたち

管理課が富田幸博氏（本学名誉教授）から預かる（山田先生のものらしい）

図書館から研究所に問い合わせ

瓶に詰められた砂や材質

これはなにか？だれのものか？



スポーツの歴史資料に出会う

山田良樹氏所有のモノであるといえる

1936(昭和11)年生 山口県出身

山口県立久賀高校から55年日本体育大学入学、59年卒業

1959年より2年間、東京大学教育学部健康教育学科研究生

日本体育大学助手、講師、助教授を経て、78年より教授として勤務、2007年3月定年退職

競技場の走路研究の第一人者

高校時代に自身の選手経験から陸上競技場の走路に関心を持つ

スポーツの歴史資料に出会う

選手なら誰でも日ごろの練習の成果を出したい。雨が降っても走りやすい競技場、晴天の時にも硬くならないで、スパイクがよくきく走路。そんな走路が出来ないものかと考えるようになっていった。陸上競技の面白さは、自己への戦いにある。又記録向上への戦いであると思う。それを満たしてくれる施設の必要性は絶対に研究すべきだと強く感じたのである(山田良樹『教育は感動だ!:わが熱血の時代』六甲出版、1986年、p. 183。)

スポーツの歴史資料に出会う

日体大では、卒業論文のテーマとして「体育施設・用具の研究」を選び、優秀論文に選出、その一部が『新体育』に掲載

1962年5月頃

栗本義彦（日体大学長）の要請で、東京オリンピック組織委員会の陸上競技走路専門委員会参加

スポーツの歴史資料に出会う

国立競技場の走路担当となり、9月に結果を報告するため実験を開始

実験には日体大の学生も参加

6種類の表素材を変えた走路を作成して連日、実験を繰り返す

→この時の実験のものと思われるモノあり

9月2日 試験結果を報告

走路としてネオHアンツーカーを推薦

スポーツの歴史資料に出会う

山田提案に対し、排水性を巡り懐疑的な意見が出るも、浅野均一がネオHアンツーカー採用を決める

大会中も走路のメンテナンス係として大会に関わる

組織委員会事務局職員 嘱託（無給）として大会直前（1964年5月26日～1964年6月20日）にヨーロッパ諸国の競技場視察に派遣

→この時の収集したと考えられるモノもあり

山田良樹コレクションとして研究所で所蔵

スポーツの歴史資料に出会う

「日本体育大学」というブランド

スポーツの歴史資料を「受入れてくれる」と認識してくれている

日本「体育」大学であるということ

学内に数多くのスポーツ歴史資料が点在、散在している

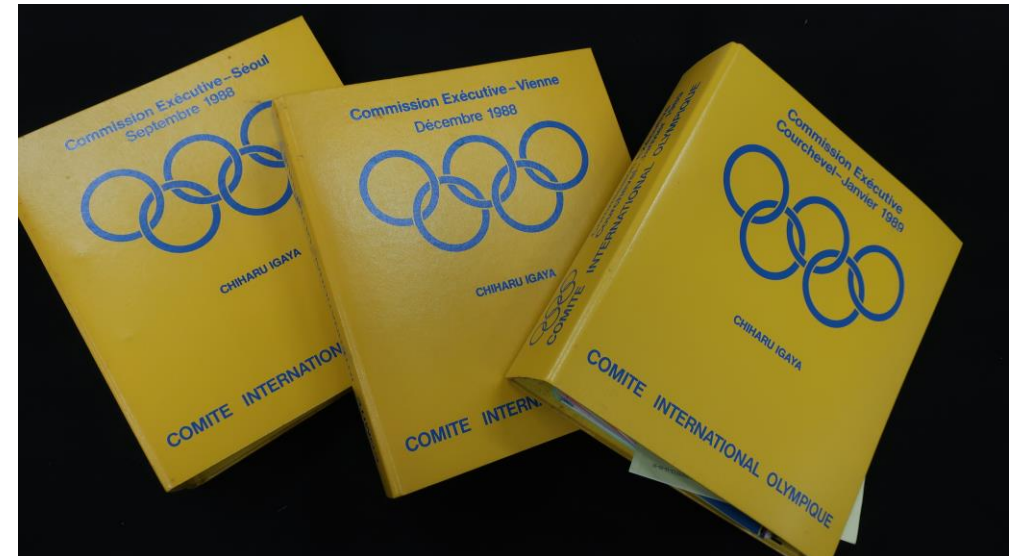
スポーツの歴史資料に「する」

猪谷千春文庫（総点数不明）

総会、理事会議事録、委員会等文書史料やメモがオリンピックスタディーセンター以外で見れる（しかも国内で!）

「個人所蔵」としての特徴

文書に記される手書きのメモ
資料群の偏り(★)



スポーツの歴史資料に「する」

招致関連史資料の豊富さ

90年代から2000年代の招致レースの「熱気」



スポーツの歴史資料に「する」

目録(リスト)の作成、整理作業

無造作に置かれる文書類の並べ替え(並べる「私」)

雑多にしまっている記念品の整理(整理する「私」)

どれから手を付けるのか(選択する「私」)

どの作業にも「私」の意思がある

史料としての整理／資料としての整理(研究関心≠研究可能性)

私にとって使いやすい整理作業になってはいないか？

スポーツの歴史資料に「する」

整理は「だれにとって」のものか

歴史資料としての切り取り方を生み出している(正直不安)

ヒストリアンの眼ではつかみきれない

図書館、博物館、アーカイブズの知見の必要性

スポーツの「歴史」資料を活かすために

研究への利活用に向けて

史資料の所蔵（大学、研究室、個人）の共有

リストの公開や資料紹介の積極的な実施

→正直、史資料の在処を知らない（※デジタル化の弊害??）

→体育・スポーツの歴史の（通史的、全体的な）見方の不足？

スポーツの「歴史」資料を活かすために

大学教育での利活用に向けて

学生たちが触れられる機会をつくる

「喪われた」オリパラ経験

大学・学部の体育・スポーツの歴史をモノで語る